

## シェイクスピアの *argumentatio*

作品解釈における修辞理論の潜在的 possibility を探って

千 種 孝 夫

### 〔序〕

当世 ‘rhetoric’ ほどに流行らぬものはない。嘗ては燐爛たる栄光を誇ったこの言葉も今や世人の翫躉を買うばかりである。修辞学に対する当世一般の猜疑と不信は『じゃじゃ馬馴し』のかかる一節に堪能する。Petruchio を評して下男 Grumio 曰く、

その阿魔っ子が旦那をやくざ者だとか何だとかどやしつけるかもしんねえ。  
だけんどそんなことは屁の河童ちうもんだ。 旦那が一旦 おっぱじめた目に  
や、 囚人学 (ropetricks) とやらでどやしつけるって寸法ですだ。 ええかな  
もお前様、 その阿魔っ子がちいとでも楯突こうもんなら、 詞姿ちうもんを顔  
の真中さぶっつけて獅子っ鼻にしちまうって寸法ですだよ……。

(*The Taming of the Shrew*, I. ii. 110-5)<sup>(1)</sup>

無学な下男に掛っては、 あわれ「修辞学」も「囚人学」と化したのである。  
Benedick の先輩格、『恋の草臥儲け』の Berowne を遅れを取らぬ。

糞、 お白粉塗りたくった修辞学め！

(*Love's Labour's Lost*, IV. iii. 239)

琥珀織見たような艶やかな文句、 絹肌の几帳面な言葉の綾、  
ビロード紺のいとも煌らな誇張法、 プロシャ革も顔負けの乙にすました虚  
飾振、  
学を衒うた詞姿の数々、 此奴等うるさい蠅どもが、  
見栄という名の蛆虫をびっしり僕に産みつけたんだ。

こんな具合にこれからは愛の言葉を囁いて見せる。

手織のラシャみたいにごつい「うん」とか、カージー出来のラシャみたいな飾り気のない「いいや」って奴で。

(*Ibid.*, V. ii. 406-9, 412-3)<sup>(2)</sup>

だがここで溜飲を下げ、快哉を叫ぶは早計である。痛罵的は「お白粉塗りたかった」修辞学であり、修辞学そのものではない。美を誇示し学を衒った言葉の綾、これがビルーンの台詞の眼目である。修辞学の領分の広汎なるは吾人の想像を絶するものであり、当のビルーン第二の台詞は、案出 *inventio*, 配置 *dispositio*, *collocatio*, 修辞 *elocutio*, 記憶 *memoria*, 演述 *pronuntiatio*, *actio* の五つより成る演説者の機能のうち、殊に *elocutio* に纏る言辞である。しかし不自然な筆法は Aristotle の昔より戒められていたのである<sup>(3)</sup>。さらに作者不詳の『ヘレニウスに与ふる書』*Ad Herennium*, Cicero の手になる *Orator*, *De Oratore* 等は後、伝統にしっかりと根を下すことになる崇高体、中庸体、平明体なる三文体の理論に関して頗る厳正な判断力を要請し、平明体においては並々ならぬ抑制の必要を説いている<sup>(4)</sup>。かつまた『ヘレニウスに与ふる書』(IV. x. 15) は崇高体紛の似非美文を膨張体と名付け、腫瘍に擬えて読者に警告を発している。ビルーンの台詞も畢竟、修辞学の根柢を覆すものではない。彼の台詞は「出来の悪い」修辞学から「出来の良い」修辞学への志向を示すにすぎない。

なるほど沙翁の作品中、「To teach, To delight, And to persuade」<sup>(5)</sup> いう修辞学本来の目的に悖る「囚人学」がないわけではない。いや、呆れるほどに出現しさえする。たとえばビルーンの独白である。

陛下は鹿狩る、俺は自分を追っかける。皆はぴっちり罠かけ終り、俺は瀝青の罠にかかる<sup>(6)</sup>——瀝青は汚す。汚す！ やな文句がとび出て来なすった。そいつあそうと、あゝ、静まれよかしわが悩み！ てなことをあの阿呆が抜かしやあがったとか云ったっけなあ。俺もそう抜かした。するてえと俺は阿呆ってなことになる。見事わが智恵、天晴な証明振よ！ 早い話がこの惚れ

れっ振やあエージャックス並の気狂い沙汰だ。こいつのお蔭で嫌らしい羊が  
ころり。こいつのお蔭で俺もころり。俺は嫌らしい羊ってなことになる。俺  
の言分を又しても見事証明し終えたり、立派なもんさ！ べら棒め、惚れて  
たまるかってんだ。惚れるくれえなら死んじまえ。そうよ、惚れてたまるも  
んかってえんだ。

(*Ibid.*, IV. iii. 1-10)

かよう一見して明らかな修辞学（狭義の修辞学は論理学と不離不即の関係にあり、広義かつ伝統的な意味での修辞学、即ち oratory は論理学をも少なからず吸收していた）の濫用は喜劇において甚だしく、道化役にあって最も顕著である。換言すれば三枚目連の滑稽至極な修辞学の濫用は沙翁劇の喜劇的側面を支える一大支柱なのである。笑いは理智的、批判的なもの。だがその笑いも修辞学そのものの榮誉を汚すものではない。Discourse of reason の発現たる価値ある修辞学を無知蒙昧の族が屁ほどの価値もない事物にしたり顔で適用するその懸隔の甚しさ、その馬鹿さ加減に観客は抱腹絶倒するのである<sup>(7)</sup>。修辞学は依然 discourse of reason 発動の具であり、Perry Miller の言葉を借りるならば「天与の文明の具、秩序と社会的結束の媒介」<sup>(8)</sup> なのであった。沙翁劇中に看取しうる修辞技法の衰退も、実は衰退というよりは抑制であり、見せる技から隠した技への推移であり、詰るところ彼の文章遍歴も当時の熱烈な修辞学崇拜の跡を出でていないのである<sup>(9)</sup>。

先にも触れた通り、広義かつ伝統的な意味での修辞学（即ち oratory）は論証 argumentatio というものも等閑にしてはいない。たとえば『ヘレニウスに与ふる書』巻の二、二十三章から二十九章は誤てる論法を扱い、偶然の誤謬、不適中の誤謬、論点窃取の誤謬、不当理由の誤謬等々、論理学に所謂推理の誤謬を論ずるに寄かでない。美辞麗句を並べ大仰に虚空を睨んで獅子吼するというわれわれの修辞学との連想はけっして全てを尽してはいない。修辞学は軽薄者の銜いの具ではなかった。事実、才氣を殺し淡々と語る Quintilian の記述に接する者は Pope 共々かく嘆ぜざるをえない。

In grave Quintilian's copious work, we find  
The justest rules, and clearest method join'd :

(*An Essay on Criticism*, 669-70)

三段論法とは論点窃取の誤謬の一種なりという J. S. Mill の批判はいうまでもなく、科学万能の現代、三段論法、演繹推理、延いては形式論理学は一向に流行らぬ。しかも今どき文芸作品を三段論法によって分析するなどとは時代錯誤も甚だしい。しかし現代的評価はともかく、十六世紀は狭義の修辞学並びに形式論理に絶大なる期待を掛け情熱を傾けた時代であり、当時の grammar school 上級課程においては文芸作品の解釈に当って文法上の難点の解決、詞姿の指摘などと共に、三段論法等による論理の分析を年端の行かぬ生徒に課した時代である。一般読者を対象とした論理学書も同様であった。たとえば Dudley Fenner なる人はその著 *The Artes of Logike and Rhetorike* (1584) 卷末に仮言三段論法等によって『ピレモン書』を分析したのである<sup>(10)</sup>。

沙翁劇はその大いなるが故に時代を超越した存在と見なされるが、その妥当なるは論をまたない。しかしやもすればこの沙翁劇の普遍性が、沙翁とててもまた怪しげな当時の生理学を信じ、妙な迷信を信じた時代の子でもあったことを我々に忘れさせる恐れもある。沙翁劇の普遍性と時代性……ハムレットの下した俳優乃至演劇の定義は何であったか?——‘the ab stracts and brief chronicles of the time’ (*Ham.* II. ii. 548-9)。なるほどハムレットと沙翁とを同一視するのは論理の飛躍に外ならない。だが上の台詞はやゝもすれば我々の陥り易い普遍性崇拜一辺倒に一服の下剤とはなってくれそうだ。沙翁の時代の grammar school 卒業程度の人間の脳波にわれわれの脳波を合せて見ることも強ち時間の浪費でもあるまい。

以下本論はかかる認識を基として、『ヴェニスの商人』中 Belmont に展開する三つの小箱選びの場 (II. vii, II. ix, III. ii) において Portia の愛を求める三人の人物 (Prince of Morocco, Prince of Arragon, Bassanio) が各々その独白中に展り開ける三つの小箱に関する論証を極力ありていに眺め、沙翁の

修辞理論の知識を再検討し、更には修辞理論の研究が沙翁劇解釈に資する一つの手立てとなりうるか否かを模索した実験の所産である。

## I

一番手は Morocco。三つの小箱を前に三段論法風の推論を開始する。先づ鉛の小箱に對して曰く、

What says this leaden casket?  
 'Who chooseth me must give and hazard all he hath.'  
 Must give: for what? for lead? hazard for lead?  
 This casket threatens. Men that hazard all  
 Do it in hope of fair advantages:  
 A golden mind stoops not to shows of dross;  
 I'll then nor give nor hazard aught for lead.

(II. vii. 15-21)

やや入り組んだ 様相を呈しているが 野暮を承知で（當時は野暮でもなかった）最も手堅い定言三段論法第一格に還元すれば（括弧内は省略部分）、

大前提 鉛の箱は取るに足らぬ物である。

（大前提） 気高き者は取るに足らぬ物に全てを賭けるべきではない。

（小前提）（余は気高き者である。）

小前提（結論）（余は取るに足らぬ物に全てを賭けるべきではない。）

結論 ∴余は鉛の箱に全てを賭けるべきではない。

この推理で注目すべきは大前提「鉛の箱は取るに足らぬ物である」(for lead? hazard for lead?) の妥当性が甚だ疑わしいという点である。吾人はここで「大前提に異論あり」('I deny your major' (*I Henry IV*, II. iv. 544)) というフォールスタッフの台詞を借りてこの命題を斥けることができる。モロッコの判断は外觀に惑わされて妥当性を失ったのである。さらに頃末なことだが、小前提のそのまた小前提「余は気高き者である」という暗々裏の命題が彼の自尊心並々ならぬことを示しているのは面白い。

銀の小箱に関するモロッコの台詞は次の通り。

What says the silver with her virgin hue?

大前提 'Who chooseth me shall get as much as he deserves.'

小前提 As much as I deserve! why, that's the lady:

証明 I do in birth deserve her, and in fortunes,

In graces and in qualities of breeding;

But more than these, in love I do deserve.

(II. vii. 22-3, 31-4)

即ち第一格に還元すれば、

余の分相応のものこそ銀の箱を選んで余の得るものである。

ボーシャは余の分相応のものである。

(∴ボーシャこそ金の箱を選んで余の得るものである。)

小前提の効力が怪しいと訝しむ向もおありかもしない。だが上記の如く小前提は証明されたと解すべきである。モロッコの直面した問題は一にこの小前提、即ち自分の分相応のものとはボーシャか否かである。故にここで彼は己とボーシャとの値打(?)を比較せねばならぬ。ところで四世紀(A. D.)のギリシャの修辞学者 Aphthonius に『予備演習篇』*Progymnasmata* なる著があり、これはのちに文芸復興期の人文学者の手によりラテン訳に装いを改め、十六世紀 grammar school におけるラテン作文の標準的教科書となった。正規の雄弁術演習に備える予備演習のためのこの教科書は十四の作文形式を擁していたが、比較 Comparatio とは何あろうその十四の作文形式のうち、第十に数えられるものであった。してこの Comparatio は称讃 Laus 及び誹謗 Vituperatio と称する Aphthonius 第八及び第九作文形式と同じ項目を用いて比較を行うのであり、その Laus のための項目とは次の如きであった<sup>(11)</sup>。

ついで生れ (genus) を付すべし。	氏 生國 先祖 親
生れはかく分たれる	

しかる後育ち(educatio)を開陳す べし。育ちの構成はかくの如し	教養 特技 規律
ここにおいて全ての称讃中の主た る項目, 功 (res gestae) を添加 すべし。功は次の如く分つべし。	心の (Animi)。例一剛毅, 恩慮に屬 する事(物)。
	体の (Corporis)。例一美貌, 敏捷, 腕力。
	身の上の (Fortunae)。例一指揮官の 職, 政治権力, 富, 交友。

即ち Laus のため, 延いては Comparatio のための項目は

- |                |                  |                  |             |
|----------------|------------------|------------------|-------------|
| (1) 生れ genus   | (2) 育ち educatio  | (3) 功 res gestae | a. 心の animi |
| b. 体の corporis | c. 身の上の fortunae |                  |             |

と分たれるわけである。片やモロッコの挙げた項目とは birth, fortunes, graces, qualities of breeding, love であった。Birth—genus, fortunes—fortuna, graces—corpus, qualities of breeding—educatio, love—animus。彼の文句は Laus 及び Comparatio の項目と過不足なく符合する。自然児こと沙翁はどうやら Aphthonius を知っていたようである<sup>(12)</sup>。

かくて Comparatio の諸項目を逐一吟味し, 無納にも似た論法で小前提を証明し終えたモロッコはその演繹推理の妥当性に満足し, 彼の決は銀の小箱に落着しようとするが, 一瞬の逡巡の後, 猜疑を逞しうして金の小箱の吟味に移る。無骨者のモロッコにかほどの慎重さ! ……ボージャはさほどに素晴らしい女性だったのである。

Let's see once more this saying graved in gold ;  
 大前提 'Who chooseth me shall gain what many men desire.'  
 小前提 Why, that's the lady ;  
 証明 all the world desires her ;  
 強調 From the four corners of the earth they come,  
     To kiss this shrine, this mortal-breathing saint :  
     The Hyrcanian deserts and the vasty wilds

Of wide Arabia are as thoroughfares now  
 For princes to come view fair Portia:  
 The watery kingdom, whose ambitious head  
 Spits in the face of heaven, is no bar  
 To stop the foreign spirits, but they come,  
 As o'er a brook, to see fair Portia.

(II. vii. 36-47)

根柢を成す三段論法は次の通り。

数多の者の望むものこそ金の箱を選んで余の得るものである。  
 ポーシャは数多の者の望むものである。  
 (∴ ポーシャこそ金の箱を選んで余の得るものである。)

既に一幕二場ポーシャの求婚者の品定めに見るごとく、彼女の愛を求める者は数知れぬ。彼女の名聞世に高く、踵を接して求婚者が殺到するのであった。されば小前提の証明は完全である。続く数行は Amplificatio。Amplificatio とは敷衍、水増しの意ではない。その意味するところは空間的拡充ではなく、熾烈度の増大化、即ち強調である<sup>(13)</sup>。この道の権威キケロの言に従えば、

The right place for Amplification is in the peroration; but also in the course of the speech there are opportunities to digress for the sake of amplification, when some point has been proved or refuted: Amplification is, then, a more impressive affirmation, so to speak, which by moving the mind wins belief in speaking.

(*De Partitione Oratoria*, xv. 53)<sup>(14)</sup>

即ち Amplificatio（以下仮に「強調」と呼ぶ）は証明と無関係ではないが、その機能たるや第一義的に pathos 的であり、logos 的なるはその本質でない。されば「強調」部分においては多分に熾烈かつ不羈奔放な文章が予期できるわけである。果せる哉、モロッコの台詞は白熱の極みに達する。今やこのオセロにも似た人物は、ポーシャへの万人の憧憬を高らかに唱い上げる。否、この素朴の人は、腹の底から己が憧憬を吐露せんにはいられないのだ。論理の桎梏を脱したモロッコはしばし論証を忘れ恍惚の境に遊ぶ。推論途上のあの味気ない

文章のここに到って轟然たる怒涛と化すその対称や如何。渺々たる砂漠は人行交う巷と化し、大海は細流と化したのだ。……さて誇張法 hyperbole は「強調」の一大武器であった。だがここにおいて hyperbole は一技法たるを越えてモロッコの性格そのものと化したのである。この一幅の絵を脳裏に描かれたい。

The watery kingdom, whose ambitious head  
Spits in the face of heaven,

(II. vii. 44-5)

かようすに沙翁は証明と「強調」の本質的相違という修辞学上の規範に身を委ねつつも「強調」の部分においてモロッコの性格を鮮かに描きえたのである。沙翁の力や大なり。さて金の小箱に関して無事論証を終えたモロッコは入念にもついで再び鉛と銀の小箱について簡単乍ら反駁 confutatio, reprehensio に掛り、その後数行に亘って「強調」を用い、遂に金の小箱を開ける。答は無論‘No’。

||

一場において後、第二の候補は Arragon。論議的には先づ鉛の小箱である。だが如何せん、彼はこれを一笑に付す。

‘Who chooseth me must give and hazard all he hath.’  
You shall look fairer, ere I give or hazard.

(II. ix. 21-2)

彼はモロッコの轍を踏んだのである。さきにモロッコの失敗を眼の辺りにした観客にはアラゴンの運命がここで読めたのだ。だが露ほどにもそれを知らぬ彼は金の小箱と対峙して省略なき完全な三段論法に入る。

What says the golden chest? ha! let me see:  
‘Who chooseth me shall gain what many men desire.’  
大前提 What many men desire! that ‘many’ may be meant  
By (=for) the fool multitude, that choose by show,

- 説明 Not learning more than the fond eye doth teach ;  
 強調 Which pries not to the interior, but, like the martlet,  
 Builds in the weather on the outward wall,  
 Even in the force and road of casualty.  
 結論 I will not choose what many men desire,  
 小前提 Because I will not jump with common spirits  
 And rank with the barbarous multitudes.

(II. ix. 23-33)

即ち彼の演繹推理は次のとおり第二格を踏まえている。

数多の者の望むものとは鳥合の衆の望むものかもしれない。

余は鳥合の衆の望むものを欲さない。

∴余は数多の者の望むものを欲さない。

アラゴンは大前提を定立するや、この判断の妥当なるがゆえ証明代りに説明を付して後、無智蒙昧の族の愚劣さを「強調」するに到る。この台詞に見られるmetaphor また「強調」の武器であった。『ハムレット』期を頂点とする力強い名詞句‘the force and road of casualty’もまた一顧に値する。「強調」に一種 digression の如き感あるに関しては前掲キケロの記述を参照されたい。さて最後に対するは銀の小箱である。

- 大前提 Why, then to thee, thou silver treasure-house ;  
 Tell me once more what title thou dost bear :  
 ‘Who chooseth me shall get as much as he deserves :’  
 And well said too ;
- 証明 for who shall go about  
 To cozen fortune and be honourable  
 Without the stamp of merit ? Let none presume  
 To wear an underserved dignity.
- 強調 O, that estates, degrees and offices  
 Were not derived corruptly, and that clear honour  
 Were purchased by the merit of the wearer !  
 How many then should cover that stand bare !  
 How many be commanded that command !

How much low peasantry would be glean'd  
 From the true seed of honour ! and how much honour  
 Pick'd from the chaff and ruin of the times  
 To be new-varnish'd !

Well, but to my choice :

'Who chooseth me shall get as much as he deserves.'

小前提 I will assume desert.

(II. ix. 34-51)

金の小箱の場合同様、アラゴンの推理はモロッコの推理とはやや趣きを異にしている。文脈から察するにアラゴンは銀の小箱の碑文の謎をかく解して大前提としているらしい。即ち、

然るべき価値ある者は栄誉を得ることができる。

そしてこの大前提是続く三行半で証される。

何となれば然るべき価値なき者は栄誉を得ることができぬが故に。

即ち、大前提是矛盾対当による直接推理によって証されている。証明を終えるやアラゴンは栄誉と真価との喚かわしき懸隔を続く九行で「強調」する。うち最も顕著なるは『雄弁術指南』(Quintilian, *Institutio Oratoria*, VIII. iv. 26-7) 説くところの「強調」の四大武器中第四の技法、集積法 *congeries* であり、一つのことをさまざまに言い換え強調するこの技法に加えて、同じく「強調」に資する烈々たる前部反覆 (ep)anaphora, 喚情力豊かな絶叫 ecphonesis, exclamatio とが、「強調」部分をさらに熾烈たらしめている。さらに注目すべきは大前提証明部に微かに窺えた譬喩的言語への傾向が第四十行の ‘wear’ を端緒として honour—wearer—cover—bare という驚くべき連想の糸となって発展するという事実である。後年『マクベス』において七度の多き<sup>(15)</sup> に亘って現われ、現象と実体のテーマに微妙な影を落すことになる栄誉と衣裳とのこの特異な連想の出現は、実に沙翁の驚嘆すべき想像力が突如ここに出現するに到ったことを意味している。言葉が言葉を呼び、連想が連想を産む彼一流の想像力はさらに peasantry—glean'd—seed—chaff なる新たな連想の鎖を成す。奔

放極りない ‘the chaff and ruin of the times’ また沙翁ならでは。卑俗なると野卑なるを問はず、有用のイメージは使わでなるものかというあの沙翁の沙翁たる所以、転んでも只では起きぬ貪欲な想像力が、今や堰を切って溢れ出たのだ。無味乾燥な論証部と豊溢な強調部とは修辞学の原則通り、かく截然と区別されているのである。

アラゴンの三段論法はつぎの如き第一格に還元できる。

然るべき価値ある者は栄誉を得ることができる。

余は然るべき価値ある者である。

(∴余は栄誉を得ることができる。)

小前提是 ‘I will assume desert’ に表れている。即ちアラゴンは、我に然るべき価値ありと敢て解そうと云っているのである。されば小前提是有效と解さざるをえない。かくて三段論法は完了し銀の小箱に断を下す。結果は既に見えていた。彼もまた失敗したのだ。

「おやおや、この慎重なお馬鹿さん達ときたら！」(II. ix. 80)。苦心惨憺の推論の拳句モロッコとアラゴンの受けた酬がポーシャのこの台詞であった。これに関して Pooler 曰く、‘The right choice depended not on reasoning but on love.’<sup>(16)</sup> 然り、両者ともに至極慎重な syllogistic reasoning を展開した。こと金と銀との小箱に関しては、彼等の間接演繹推理の慎重さたるや愛想が尽きるほどであった。だが彼等は貧相な鉛の小箱の外観に翻弄され、これを一笑に付したのだ。見てくれの愛と見てくれを越えた眞の愛、三つの小箱の謎に潜むこの愛の不思議が彼等には通じなかったのである。

### III

拒否さるべき金銀の小箱に対し 殊更 仰々しく 推論する モロッコとアラゴン——ここに観客の安堵と愉悦が生ずる。だが Bassanio の場合はそうであってはならない。三つの小箱のうち、金銀二つの秘密が露わになった今、残るは鉛の小箱唯一つ。観客には既にバッサニオの成功が分っている。いや、第一幕で

既に分っていたのだ。されば観客の安堵は安堵に終ってはならない。懸念というものが介入しなければならぬ。そしてこの懸念はたとえばバッサニオ小箱選びの場冒頭、かかる何気ない台詞によって挿立てられる。

I pray you tarry : pause a day or two  
Before you hazard ;

(III. ii. 1-2)

ここで観客はポーシャと一緒に成りきらねばならぬ。さてやがてポーシャ語つて曰く、

Let music sound while he doth make his choice ;  
Then, if he lose, he makes a swan-like end,  
Fading in music : that the comparison  
May stand more proper, my eyes shall be the stream  
And watery death-bed for him.

(III. ii. 43-7)

無論ここで云う ‘comparison’ は想念の詞姿、譬喻 similitudo (icon, *imago* の名を付せられた、我々の所謂 simile とはいささか異なる) である<sup>(17)</sup>。それにしてもこのポーシャの譬喻は何であろうか? ——手を変え品を変え何と二十一行 (III. ii. 44-60) の長きに亘るのである。麗々しい冗漫な narrative にすぎぬではないか、切迫した状況にあってこれはいかにも空々しい台詞ではないか、劇的機能が丸でないではないかと、ここで我々は問いたくなる。だが沙翁は劇作を忘れ、美しい詩篇をものして陶酔しているわけではない。歴とした劇的機能があったのである。譬喻 similitudo また「強調」の有用の具であった。沙翁の意図は「強調」だったのである。一にこの台詞は女主人公の懸念如何ばかりかを知れよかしと観衆に放たれた「合図」なのであり、「強調」という合図を受けた観衆がここでポーシャ共々大いなる懸念を覚えるようにというのが、他ならぬ沙翁の意図なのである。そして、長時間に亘る修辞色濃厚な説教を聞き慣れた当時の観衆、殊に（教科書乃至一般向修辞学書によって）いさかなりとも修辞学を嗜ったことのある観衆は、修辞の技法がそれ出て来たぞ

と大いに批判の目を見開きつつも、ポーシャの台詞の機能を看取し、かつまたその台詞の織りなす絢爛たる錦絵を心に描き、胸脹らませ、懸念をポーシャと共にしたのではないだろうか。一見劇的要素を欠く怨みのあるこの台詞も、それはそれなりの存在理由があるのである。もっとも円熟期の沙翁ならばポーシャの台詞に見るが如き「時よ止れ」式、物語的展開によらず、登場人物相互の何気ない言葉のやりとり、一寸した間の置き方によって、知らぬ間にこちらの心を奪ったことであろうが。

さて観衆の耳目を集めていよいよバッサニオの小箱選びである。モロッコとアラゴンの金銀二つの小箱に対する推理たるや慎重そのものであった。バッサニオも劣らぬ慎重振を發揮する。彼の推理は前の二者の三段論法とはいささか趣きを異にしている。即ち彼の推論はぎくしゃくとした本来の三段論法を用いず、『ヘレニウスに与ふる書』に所謂「完全にして完璧なる論法」(II. viii. 28), 「完璧にして全き論法」(II. xx. 31) を用いている。この論法は往時弘く用いられた教科書、『書翰文作法論』 Erasmus, *De Conscriptis Epistolis* も collectio の名を冠して扱っている修辞風論法の代表的存在であり、碩学 T. W. Baldwin もこの論法の紛う方なき沙翁の実践例を二個所指摘している<sup>(18)</sup>。この論法の構造は (1) 提題 propositio, expositio (2) 理由 ratio (3) 理由の証明 rationis confirmatio (4) 装飾 exornatio (5) 結論 complexio であった。以下これに準拠してバッサニオの独白を分析すれば次のようである。

提 題	So may the outward shows be least themselves :
理 由	The world is still deceived with ornament.
理由の証明	(1) In law, what plea so tainted and corrupt But, being season'd with a gracious voice, Obscures the show of evil ? (2) In religion, What damned error, but some sober brow Will bless it and approve it with a text, Hiding the grossness with fair ornament ? (3) There is no vice so simple but assumes Some mark of virtue on his outward parts :

(4) How many cowards, whose hearts are all as false  
 As stairs of sand, wear yet upon their chins  
 The beards of Hercules and frowning Mars,  
 Who, inward search'd, have livers white as milk ;  
 And these assume but valour's excrement  
 To render them redoubted ! (5) Look on beauty,  
 And you shall see 'tis purchased by the weight ;  
 Which therein works a miracle in nature,  
 Making them lightest that wear most of it :  
 (6) So are those crisped snaky golden locks  
 Which make such wanton gambols with the wind,  
 Upon supposed fairness, often known  
 To be the dowry of a second head,  
 The skull that bred them in the sepulchre.

結論 Thus ornament is but the guiled shore  
 To a most dangerous sea ; the beauteous scarf  
 Veiling an Indian beauty ; in a word,  
 The seeming truth which cunning times put on  
 To entrap the wisest.

(III. ii. 73-101)

吟味のため『ヘレニウスに与ふる書』の所説に耳傾けようではないか。曰く、

提題とは証明せんと欲することの何たるかを手短かに示す所以のものなり。  
 理由とは主張せんとすることの真なるを短かき付言もて示すところの原因  
 なり。理由の証明とは数多の論拠もて手短かに表明されたる理由をば確立  
 するものなり。装飾とは内容に威嚴を添へかつまた豊溢たらしめんがため、  
 推論の証明さるるや用ふるものなり。結論とは推論の各部分をば手短かに  
 繼め合せ論をば仕上ぐるものなり。

(Ad Herennium, II. xviii. 28)<sup>(19)</sup>

果せる哉、バッサニオの「理由の証明」は「数多の論拠もて手短かに表明され  
 たる理由をば確立」している。しかば「装飾」exornatio は何処。否、「装  
 飾」は不要であった。同書に曰く、

或は又内容豊かならずて強調及び装飾は施すに足らずと覺しき折、「装飾」は省略すべきなり。

(*Ibid.*, II. xix. 30)<sup>(20)</sup>

事実ボールドウインの指摘したこの論法の実践例は何れも「装飾」を省いている。『ヘレニウスに与ふる書』と『書翰文作法論』、このうち何れの書から沙翁がこの論法を得たかは吾人の知るところではない。がしかもしも前者が所出であるとすれば、モロッコとアラゴンの金銀の小箱選びに際しての矢鱈煩瑣な三段論法と好対称を成す至極明快な「完全にして完璧なる論法」は蓋しバッサニオに沙翁が与えた *tribute* というものだったのかもしれない。少なくともこの論法は貴かるべき修辞学の数少ない理想的論法中にしっかと座していたのである<sup>(21)</sup>。 三つの小箱選びは一に眞の愛を試さんがためのものであった。片や外観に惑い眞の愛の何たるかに盲であったモロッコとアラゴン。片や外観を見透し愛の愛たる所以を看取したバッサニオ。小箱選びの謎、愛の不思議を慮らず仰々しく生硬な推理の迷路に陥り、心眼を澄ますことのできぬ前者二人。素朴に論を進め、愛の不思議を悟りえたバッサニオ。彼に加えられた諸々の譏、偽善と欲望の奴卑たりとのバッサニオ觀は、所詮好奇と偏見との産み出した幻であったのかもしれない。バッサニオを譏りボーファを非難したとき、世の知識人は凡庸の庶民から平凡な、しかし何人も侵しえぬ観劇の喜びを奪ったのかかもしれない。真率の人ネリッサはバッサニオをかく評した——‘a scholar and a soldier’ (I. ii. 124)。彼はルネッサンスの理想的人間像だったのである。

#### 〔註〕

- (1) Schmidt, *Shakespeare Lexicon*, s. v., ‘Ropetricks’: ‘tricks deserving the halter ; Grumio’s word for *rhetoric*.’ 即ち絞首刑に逢つて然るべき悪ふざけ、無学の徒グルミオの malapropism であり、「修辞学」の積りとなれば、やはり「囚人学」である。因みに原文の ‘figure’ と ‘disfigure’ の paronomasia は拙訳にて「詞姿」、「獅子っ鼻」に化けた。
- (2) これは明らかに古来の文飾と衣裳との譬を意識した台詞である。故に拙訳では冗長に流れるを覚悟で敢えて原文の衣裳の譬を訳出した。衣裳と体、文飾と内容の

密接極りない関係は Puttenham, *The Arte of English Poesie*, 1589, Gregory Smith (ed.), *Elizabethan Critical Essays*, II. 134 にかなりはっきりしている (The italics are the present writer's): ‘...so neuerthelesse as if the same coulours in our arte of Poesie (as well as in those mechanicall artes) be not well tempered, or not well layd, or be vsed in excesse, or neuer so little disordered or misplaced, they not onely giue it no maner of grace at all, but rather do disfigure the stiffe and spill the whole workmanship, taking away all bewtie and good liking from it ....’ また、生地のままの sentiment は裸同様と彼等は考えたのであるが、それはあたかも白昼大道を闊歩することが気狂い沙汰であり、猿のしわざに等しいというほどの強い意味だった。 See Rosemond Tuve, *Elizabethan and Metaphysical Imagery* (Chicago, 1947; 1963), p.61; M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (London, 1951; 1961), p.39.

- (3) Aristotle, *Rhetorica*, III. ii. 1-2 は文体の主たる長所として明晰性及び（主題との）適切性  $\tauὸ \piρέποντ$  を挙げ、III. iii. 1-4 は文章が生硬となる原因を論じ、III. vii. 1-7 は  $\tauὸ \piρέποντ$ , 即ち decorum の必要を改めて論じている。Decorum と聞くとぞっとするが、考えて見ると真の decorum は良き文学の根柢を成すものであり、作家を助けるものはずである。だが、万物は流転す、何時の間にか作家の足を引張るものとなってしまった。
- (4) この三文体の理論は形式主義に堕したものではない。臨機応変文体を変えるべきということに関しては *De Oratore*, III. xlvi. 177, 三文体使用に際しての判断力の必要に関しては *De Oratore*, III. lv. 212 を参照されたい。理智的な文体、平明体に伴う甚大な抑制の必要については、いわゆるアッティカ文体を論ずる個所, *Orator*, xxiii. 76-xxvi. 90 に詳しい。尚 Cicero は *De Oratore*, III. lii. 199 において、堂々たる崇高体、力強さを失なわぬ眞の平明体、両者の中間に位する中庸体に触れて後、三文体に関してかく述べている、「かかる三つの型にはうはべに塗りたつるにあらずて血脉に拡がれる何がしかの魅力ある潤色 (venustatis ... color) の存するを要す。」即ちどの文体においてもきらと輝くもの（それが所謂美であれ、抑制の美であれ、力の美であれ）が必要なのであり、装飾とは取って付けたものでなく、吾人の sentiment と共に生きる有機的存在だったのである。「装飾」の観念は ‘rhetoric’, ‘rhetorical’, ‘artificial’ 等と共に根本的かつ致命的な変化を蒙ったのである。
- (5) Thomas Wilson, *The Arte of Rhetorique* (ed. G. H. Mair, a reprint of the edition of 1585; Oxford, 1909), p. 2. Cf. Cicero, *Orator*, xxi. 69; *De Optimo*

*Genere Oratorum*, i. 3.

- (6) 妙な駄洒落となつたが致し方ない。原文は ‘they have pitched a toil; I am toiling in a pitch.’
- (7) So Allan H. Gilbert, ‘Logic in the Elizabethan Drama,’ *Studies in Philology*, XXXII. 544 ff., cited in Sister Miriam Joseph, *Shakespeare's Use of the Arts of Language* (New York, 1947; 1966), p. 190, note. さらに論理学の全盛期にあってもかかる論理学の濫用が笑いの種となつてゐるといふこと、即ち馬鹿げた論理の濫用に哄笑するといふことが論理学の尊嚴を損うことにはならぬといふ点に関しては Hardin Craig, *The Enchanted Glass* (New York, 1935; Oxford, 1966), pp. 151-2 を参照されたい。
- (8) *The New England Mind* (New York, 1939; Boston, 1965), I. 306.
- (9) See Hardin Craig, *op. cit.*, pp. 160-1, p. 166.
- (10) Cited in Miriam Joseph, *op. cit.*, pp. 349-53. Fenner の分析は微に入り細を穿ち、多少の忍耐さえあれば興味尽きない。
- (11) Cited in T. W. Baldwin, *William Shakespeare's Small Latine and Lesse Greeke* (Urbana, 1944; 1956), II. 335. 尚、引用文中「功」res gestae なる言葉はいさか奇異の感を与える。微力な筆者にはその含蓄が分りかねるが、これに関する『ヘレニウスに与ふる書』(III. vii. 14) が多少の光を投じてくれる。曰く、「腕力並びに敏捷度抜群の場合は、かかるもの殊勝にして我々迄々たる修練の賜物なりと述ぶべし。健やかさ絶へざる場合は、(これ)用心と欲望の抑制との賜物なりと(述ぶべし)。」体と外的なるものの利や不利は心の投影であり、心的努力によってかち得たものと云えるのかもしれない。因みに同書の称讃の項目の scheme は(『ヘレニウスに与ふる書』III. v. 10) 次の通り(なお Aphthonius と比較するため「外的の利」を詳述する)。

/ 外的の利 (commoda) rerum externarum (生れ genus, 育ち educatio, 富, 権力, 荣誉, 公民としての身分, 交友)	\ 体の利 (commoda) corporis \ 心の長所 (virtutes) animi
--	---

即ち Aphthonius に見るがごとき五重構造性が分明でない。

- (12) 流石の T. W. Baldwin もこの個所が Aphthonius と符合することを見落したようだ。彼 (*op. cit.*, II. 335) は Aphthonius 流の五つの項目を沙翁が活用し尽していないと説くが、我々の見た如くこれは事実ではない。微々たりとはいふこの小さな発見は Aphthonius の影響を説く Baldwin の仮説を支える一つの資と云えるかもしれない。尚 Aphthonius の衣鉢を継いだ Richard Rainolde の

*A Book called the Foundation of Rhetorike* は1563年に上梓されたが、二度と日の目を見なかつた。この方面のベストセラー、 Thomas Wilson の *The Arte of Rhetorique* とこと異り、 Rainolde の著が沙翁の目に触れたという可能性はまず零に等しい。

- (13) Rosemond Tuve 女史 (*op. cit.*, p. 90) に云わせると Amplificatio はいわば ‘loud speaker’ である。また Amplificatio が現代の所謂 ‘expanding’, ‘dilating upon’ とは大いに異なると女史が (p. 89) 論じているのは妥当である。ただし Amplificatio の意味には多少の動搖があつたようだ。W. G. Crane, *Wit and Rhetoric in the Renaissance* (New York, 1937), p. 99, cited in Baldwin, *op. cit.*, II. 37 : ‘He [Sherry] used the term “amplification” in the restricted sense of the exaggeration or extenuation of a matter, but he noted that the word might be used in a broader sense to include all the means of expanding a subject, as was pointed out in the commentary on Erasmus’s *De duplice copia verborum ac rerum* by John Doelsch, known also under the names of Weltkirch and Velcurio.’
- (14) この明快な英訳は同書の Loeb 訳ではなく、『ヘレニウスに与ふる書』の Loeb 版 p. 146 脚註の中の名訳である。
- (15) See Caroline Spurgeon, *Shakespeare’s Imagery, etc.* (Cambridge, 1935; New York, 1965), pp. 324-7.
- (16) Cited in J. R. Brown (ed.), *The Merchant of Venice* (New Arden Sh.; 1955; 1961), note on II. ix. 80.
- (17) 当時の貴重な Cooper の羅英辞書に関して Baldwin (*op. cit.*, II. 166) 曰く、 ‘Cooper defines similitudines from Quintilian as “similitudes or comparisons”.’
- (18) Baldwin, *op. cit.*, II. 84-8. 二箇所とは *Meas.*, III. i. 1-43; *R 2*, I. iii. 275-93.
- (19) 「原因」の辺り Loeb のテクストは理解に苦しむ——‘Ratio est quae causam demonstrat verum esse id quod intendimus ...’。幸い Baldwin, *op. cit.*, II. 84 にはエリザベス朝当時のテクスト (ed. Lambinus, 1573) が転載してある。これによれば ‘Ratio, est causa, quae ...’。これではっきり意味を成すが、当時の版に従うべきは云う迄もない。「結論」の辺りも句読法が稍異なる。Loeb: ‘Complexio est quae concludit breviter, colligens ...’。当時の版: ‘Complexio est, quae concludit, breviter colligens ...’。即ち「…をば纏め合せ手短かに結論する…」ではなく、「…をば手短かに纏め合せ結論する…」を採用すべきである。尚イタリック体は the present writer’s である。更に「装飾」の語感については註(4) 終り近くを参照されたい。

- (20) ここにおいても Loeb 版と当時の版に多少の相違がある。前者は ‘*est cum ex-ornatio praemittenda est ...*’。後者は ‘*tum exornatio praemittenda est ...*’。即ち前者は「…裝飾は省略すべき折もあり。」後者は「或は又…裝飾は省略すべきなり。」(Italics not in the original.)
- (21) たとえば小冊ではあるが修辞学に関する Cicero の著作中最も系統的な *De Partitione Oratoria* (xiii.46) は主たる二種の論法として、問題のこの論法と Cicero その人の好んだ修辞風帶証三段論法とを挙げている。